

小さな窓から大きな世界を

—あるベンガル研究の軌跡—

白田雅之

1 「現在屋」と「歴史屋」

かつて、バングラデシュ研究の草分けの1人であった文化人類学者・原忠彦¹は、バングラデシュ研究者を現在屋と歴史屋に大別した。原自身は現在屋の大将であったが、ともすれば現実から離脱して過去の対象に沈潜しがちな歴史屋をフィールドに引っ張り出し、フィールドで歴史を考えるよう叱咤激励した。といっても、声を荒げ督戦するような野暮はしなかったが、原は研究を国際的に設定されたアリーナにおける競争と考えていた節があり、どの国が勝つかの真剣勝負とみなしていた。そこで、巨体の太鼓腹から機関銃のように繰り出される議論に、後発世代は叱咤激励のラッパの響きを聞かないわけにはいかなかった。

現在屋と歴史屋の違いは、地域研究の場合、共時的分析によるか、通時的分析によるのかの違いであると同時に、研究が実践的・政策的な有効性を持つかどうかの違いでもある。こうしたコントラストは自明なものに思われるが、研究者のライフ・ヒストリーや研究の現場に則してみれば、かならずしも明確には区別できなくなる。

現在の日本におけるベンガル研究はバングラデシュ研究が主流をなしている。東京外国語大学にベンガル研究のコースができたのも、独立国バングラデシュがあり、日本の経済にとって重要な存在として浮上してきたという事実によって陽の目を見たのであろう。1970年代の初めに、バングラデシュが独立戦争のすえに成立したとき、戦火・弾圧を逃れてインド側の西ベンガル州に脱出した1千万人を超すといわれた難民の救済活動、および独立後の復興・再生事業に、多くのヴォランティアが参加した。そのなかから、バングラデシュの現状研究も実践活動と深く関わり合いながら誕生・成長してきた。「歴史屋」やその卵たちも、街頭に立ち募金活動や、パンフレット配布などを行なったものである。バングラデシュ研究がヴォランティア活動と密接に関係して成立した

経緯は、記憶に留めておく価値があろう。

もっとも、ベンガル研究はバングラデシュ成立を契機に始まったわけではなく、20世紀初頭以来の仏教、美術を中心とした文化交流の歴史があり、タゴールの翻訳に始まるベンガル文学研究の積み重ねもある。この方面の拠点は、西ベンガルのシャンティニケトンやコルカタであった。

こうしてみると、バングラデシュ研究は「現在屋」が推進し、文化研究は西ベンガル側で「歴史屋」が関わっているといった構図で捉えられかねない。しかし、実際には東西ベンガルはさまざまな形で交差しており、「現在屋」と「歴史屋」の区別も、それほど歴然としたものではない。たとえば、英領時代の社会経済史に取り組んでいた現在60歳台の歴史研究者たちが対象とした地域は、東ベンガル（現バングラデシュ）であり、研究の場は史料の集中する西ベンガルのコルカタにあった。

2 「現在屋」と「歴史屋」の交錯——1

これからのベンガル研究を考えると、主流をなしている「現在屋」の研究に、どれだけ「歴史屋」の研究が関与していけるかが、ベンガル研究が厚みと深みをもち、政策的にも長期的に誤らないヴィジョンを打ち出していけるかどうかのポイントとなるように思われる。「現在屋」といい、「歴史屋」といって区別はするが、両者の研究の出発点が現在にあることは疑いえない。歴史は過去の出来事ではあるが、取り返しがつかない形で固定されているわけではない。つねに変化してゆく現在との関係で過去がどう見えるかを追求しているのが歴史学である。その意味で、「現在屋」の研究が刻々と古びてゆくと同じように、叙述としての歴史も刻々と過ぎゆく時間の深淵に呑みこまれてゆく。ともに現在から出発するが、対象が現在か過去かで区別が生じる。比喩を用いれば、現在は氷山の海面から突き出した部分であり、過去は海面下に沈んでいる部分である。海面上に見える部分だけを見ても、氷山を十分に認識したことにはならない。

それでも、現在の優位、緊急性は覆せない。迂遠と思われがちな文学にしても、たとえばボルヘスは、文学が自分で発見していくものであって、過去は何の役にも立たないと述べている。しかし、それは過去の文学が役に立たないとか、他人の書いた文学作品が意味をなさないということではない。それどころか、過去は何の役にも立たないということ

説明するのに、ボルヘスは古今東西の作家や作品を引き合いに出しているのである²。現在を生きる者の関心と、その関心が呼びだした作品との出会いから、それまで思いもしなかった新たな表象が生まれることがある。それが「文学を自分で発見する」ということであろう³。

3 「現在屋」と「歴史屋」の交錯——2

バングラデシュ研究が「現在屋」の領分であり、西ベンガル研究が「歴史屋」の縄張りといった誤った棲み分けは、独特の困難を引き起こすように思われる。バングラデシュ研究者は、人口の圧倒的多数をベンガリー・ムスリムが占める国家のあり方を自明の前提とする。ところが、歴史家にとっては、バングラデシュ地域（＝東ベンガル）がムスリム人口で埋まったのは、ごく最近の現象でしかない。1947年の印パ分離独立時には人口の2割強はヒンドゥーだったのである。19世紀半ば、センサスが取られる以前の東ベンガルではヒンドゥー人口の方がやや多いと思われていた。そもそも、ベンガルの人口の圧倒的多数を占める農民のなかに、ムスリムと呼びうる集団の登場が記録上確認されるのは、16世紀末からだという⁴。ところで、現在のバングラデシュ国にとって、生きる基盤は現在の事実のほかにはない。その立場から考えれば、「歴史屋」の持ち出す過去の事実などは空論以上の何ものでもない。場合によっては、国民統合を乱すノイズとしか思えないかもしれない。

つまり、「歴史屋」の観点が、ただちにイデオロギーとして機能してしまうのである。バングラデシュの人口の9割以上がムスリムであるとき、ムスリム社会の研究が中心になるのは当然だという主張が出てくる。バングラデシュ研究が結果としてムスリム社会の研究が多数を占めるのは問題ない。しかし、比率としてムスリム研究が少なすぎる、もっと比率を高めるべきだという議論はどうであろうか。生物学でも、絶滅危惧種について、数の上での比率をはるかに上回る研究が行なわれるのは、別に憂うべきことではない。何を研究すべきかは、研究者の決断に任せてよいように思われる。研究・教授職のうえでも、投下される研究費にしても、「現在屋」に比重がかけられており。それはきわめて自然な事態でもある。望まれるのは、「現在屋」が歴史研究を間接的で顧みない価値のないものと切り捨てるのではなく、そこから多くの示唆を汲み上げ、自らの現状認識に厚みを増すような交流の場を設定していくこと

であるように思われる。

4 ベンガル研究の推移

ベンガル研究も包摂する南アジア研究は、第二次大戦中に雨後の筈のように相当数の単行本が刊行された。しかし、本格的な研究は二、三の例外を除いて第二次大戦以降に始められた。第1世代は大正2桁時代から昭和10年代生まれの研究者で歴史学、言語学、人類学、文学、地理学、などの分野で始まった。その研究はそれぞれの分野における基礎を築く着実な仕事であった。南アジア研究は、第二次大戦以前はインド学・仏教学の研究だけが突出しており、現実のインドとはほぼ隔離されたところで、研究がすすめられてきた。第1世代の研究は、そうしたインド学・仏教学を批判する形で進行したといえよう。一方、インド学・仏教学のなかからも、現実のインドを意識した研究も登場するようになった。

つづく第2世代の研究者のなかには、両者の架橋を試みる研究も現れた。さらに第3世代の研究者になると、密教の遺跡を調査する仏教学者を招いて、バングラデシュの稲作を調査する地域研究者が基層文化のあり方を検討する研究会をもつまでに、学問分野と地域を跨いだ交流が行なわれるようになってきている。こうした交流がさらに活発になることが期待される。そこから、地域研究の枠組みを変えるような結論が出てくる可能性もあるように思われる⁵。

さて、昭和10年代生まれの第2世代の研究者たちは、歴史、それも近現代史を研究する者が多いのが特徴である。マルクス主義史観の圧倒的な影響下に、社会経済史の研究から入ったが、その後の研究は各自の関心の所在にしたがって分かれる。第1世代が亜大陸全体に目を配って研究したのに対して、第2世代は特定の言語州レベルに研究対象を絞っているのが特徴である。研究が細分化され、きめ細くなるのは、ある意味研究史の展開上避けられない経緯であるが、他面において投入された研究者の数が限られた状況にあっては、果たして最善の道であったかどうかは問われるかもしれない。

現在50歳前後の第3世代になると、歴史研究者はベンガル研究の場からは姿を消し、代わって文化人類学者が牽引者となる。第2世代から第3世代の間は、まとまった傾向は見られず、研究者の数も少ないが、

やはり歴史研究者は現れず、「現代屋」が開発や援助を主題としながら活躍してきた。なにより、開発と援助を必要とするバングラデシュという強力な磁場が成立したことが、この関心の変化をもたらしたものだと思われる。第3世代は、この変化を受けて、それをフィールド調査で開発や援助の実態を検討する作業を行ってきたといえよう。第3世代が、以上述べてきた研究史を整理し、総合する試みに着手していることも注目される。バングラデシュとインド側の西ベンガル州の双方でフィールドを設定するとか、共時的な社会構造の解明の努力に通時的な変化を組み込む努力を行っている。先行する2世代の業績の総括・刊行などに意を用いているのは、そうした傾向の端的な現れである⁶。

5 県レベルの研究

歴史学の研究に比べて、文化人類学の研究は対象とするフィールドがたいていは村レベルに限定される。もっとも、調査村を選定する過程で、調査村を含む広域のサーヴェイが行なわれるから、特定村研究の抱えている限定性については配慮はなされている。ところで、村落間の差異は思いのほか大きい。隣りあった村の性格がまったくといってよいほど異なる場合がめずらしくない。それは低平地のつづくバングラデシュの場合、地理学の荃口善美が指摘したような比高の差異⁷（微高低差）がもたらす農作物のヴァリエーション、河川や街道からの距離、地主家の存在、寺院、学校、市場からの距離など、さまざまな原因によって、隣接する村でさえ、その性格が大きく異なるのである。したがって、特定村の研究は、ユニオン（村落連合）、タナ（警察区）、郡（サブディヴィジョン）、県という各レベルを参照して、その制約性をつねに鋭く意識してかかる必要がある。

村レベルの研究とバングラデシュあるいはベンガル全体を対象とする研究を繋ぐものとして、県レベルの研究の広がりと言白みについて述べてみたい。筆者は最近『近代ベンガルにおけるナショナリズムと聖性』⁸と題する本をまとめた。35年以上前に書きあげた学位論文⁹を出発点に、近代インド史を特徴づける、民族運動における倫理的なエートスが生まれる土壤を探ったものである。インド・ナショナリズムのこうした特異な性格は、ガンディーの運動や、タゴールのナショナリズムそのものを否定する文学に形象化されたが、それをいち早く体現したの

が、スワデシ運動期（1903-1908）における、バコルゴンジ県の運動であった。

バコルゴンジ県のスワデシ運動に注目したのは、修論¹⁰でタゴールの『家と世界』を取り上げ、スワデシ運動を機にタゴールがなぜナショナリズム批判に向かったのかに関心があったのが遠因であった。留学中、当初予定していたタゴールで学位論文を書くのはむずかしいことに気づき、新たなテーマを探していたとき、たまたま行きつけの本屋で1冊の100ページほどの伝記¹¹を手にした。それに気づいた本屋のおやじが、その人物について話をしてくれた。どうやら、探し求めていた人物に行き着いたらしいことに気づき、1ヶ月ほどかけて読み通し、予感確信に変わった。

その伝記の主人公は、バコルゴンジ県のスワデシ運動の指導者オッシニクマル・ドットであった。伝記の作者は、シュレンドロナト・シェーン、マラータ史や大反乱の研究で知られる歴史家で、オッシニ・ドットが設立したBM学院の卒業生であった。

この出会いから始まって、20年以上オッシニ・ドットゆかりの人物につきつぎと遭遇し、20世紀前半のバコルゴンジ県にかかわるテーマばかりを追いかけた。拙著では第3章「暴力県の聖俗列伝」がそれに当たる。ブラフモ・サマーシの布教師、その妻の聖女、BM学院校長、ムスリム指導者、不可触民政政治家、ジャットラ（地方歌舞伎）の座頭兼作者、詩人と、顔ぶれは多士済済である。そのなかでも、なんとも不思議な冥合は、こうしてたまたま出会った詩人が、自分にとっては、その詩を読んでいると、まるで自分が書いているのではないかという思いがしたことである。詩人ジボナノンド・ダーシュ¹²は、ポスト・タゴールの現代詩を確立した詩人であったため、私の関心は詩を核にしたベンガル文学の方へと大きく傾くことになった。神秘化するつもりはまったくないが、不思議としかいえない出会いがあるものである。

6 宗教運動と政治運動の連関

これらの人物のすべてではないが、大部分の人に関わりがあったのが、ブラフモ・サマーシ¹³であった。バコルゴンジ県のスワデシ運動の倫理的なスワデシ運動の性格を探って行って行き着いたのも、ブラフモ・サマーシだったのである。

バコルゴンジ県のスワデシ運動の根拠地を形成したBM学院という私立学校も、1880年代初頭に始まったバコルゴンジ県の民族運動も、ブラフモ・サマージと不可分といってよいほど密接に関係していた。そして、ブラフモ・サマージと民族運動や教育・文化運動との関係は、東ベンガル、ひいてはガンジス川に沿った北インド一帯に見られた現象であった。バコルゴンジ県の状況が理解できれば、基本的には北インド一帯、さらにはブラフモ・サマージの影響下に成立したプラールトナー・サマージを通じてマハーラーシュトラの状況にも当たりをつけることが可能になる。バコルゴンジ県がスワデシ運動において焦点となったのは、バコルゴンジ県の県庁所在地ポリシャルのブラフモ・サマージの活動と民族運動や教育活動との関連に、他では見られないダイナミズムと密度があったからにほかならない。

宗教運動が政治運動の露払いの役割を努めるという図式は、いかにも宗教的なインドにふさわしい光景である。しかし、研究をつづけていくうちに、インドが宗教的であるという常識に疑いを持つようになった。インドの宗教性をかかげて先頭を走っていたブラフモ・サマージがいつのまにか後景に退き、事実上消滅してしまったのはなぜかが気になったのである。

その問題を検討したのが、拙著の第二部である。まず、ラムモホン・ラエを検討することを通じて、ブラフモ・サマージ運動が出発点から脱宗教的ベクトルを抱えこんでいたことを指摘した。さらには宗教的なインド（人）という表象が、植民地支配下に成立したものであることも指摘した。ビッドヤゴルを論じた部分では、ヒンドゥー教の中核を担うと考えられるバラモンが、必ずしも「宗教的」ではないことが示される。ラムクリシュノ（ラマクリシュナ）を論じた部分では、かれとブラフモ・サマージとの関わりを検討し、ラムクリシュノがなぜ近代ヒンドゥー教を象徴する聖者であり、ベンガル中間層の守護聖人であるのかを考えた。

第三部では、タゴールをめぐる論じているが、ポリシャルからタゴールまでを繋ぐ糸は聖性という概念である。聖性は倫理性に貫かれたスピリチュアリティにほかならない。近代インドの宗教性はスピリチュアリティだけでは解けないのであって、倫理性を加味しなければならない。ブラフモ・サマージの歴史も、倫理性とスピリチュアリティの結合と乖離の問題として論じている。情と^{きょう}か行の要素が後景に退き、倫理性が独

り歩きを始める傾向をブラフモ・サマージは当初から抱え込んでいたのである。ブラフモからコミュニストへの転進は、日本におけるユニテリアンから社会主義者（組合運動の組織者）への転進と比較し得るもので、倫理性がスピリチュアリティから分離して独り歩きした例といえよう。

7 村落調査の意義

ところで、バコルゴンジ県のスワデシ運動を調べていくうちに気になったのは、オッシニ・ドットの英国商品ボイコットの訴えが、他県に比べればはるかに大衆のもとに届き、受け容れられたというものの、肝心のドット家の居館がある村では必ずしも快く支持されてはいないことであった。原忠彦の組織した「南アジア大河流域の農村社会の研究」というプロジェクトに召集され、バングラデシュの好きな村へ行ってフィールド調査を行なってよいと言われたとき、一も二もなくオッシニ・ドットの村へ行くことに決めた。ボリシャルの地税関係文書の保管事務所で19世紀20年代からの利用できる当該村関係の文書をすべて写してから村に入り、戸別の聞き取り調査と照合して、土地の所有／保有から見た1世紀間の村の歴史の再建を試みた¹⁴。とくに焦点を当てたのは、20世紀初頭の村の状況で、スワデシ運動とちょうど重なる時期に地籍確定事業（settlement operations）が行なわれ、村内の紛争についても貴重な記録を残してくれている、そこからスワデシ運動時の村の状況についても、ある程度の推測ができるのである。

なによりも印象的だったのは、強力な地主家に対して、村人たちが地主家内部の対立をしたたかに利用して、自分たちの権利を主張していることであった。権力の所在も、土地所有権だけではとらえることができず、市場の持分や県庁所在地における影響力などによって、複雑に分有されていた。ともあれ、公文書の類などでは影の薄い、中位・下位カーストの村人（農民だけではない）たちが、状況を読みながら積極的に動き回る姿に瞠目した。それは暮らして付き合った村人たちの旺盛な生活力と符合するものであり、子どものころ耳にした、明治・大正時代の東京の近郊農村の人間模様そっくりだった¹⁵のである。

バングラデシュの村の調査のつもりが、自分の根にあるものと呼び起こすことになったのである。他者認識のつもりが、いつのまにか探索のブーメランは自分のほうへ舞い戻って来た。自分や自分を取り巻くもの

を見る目が、調査の前後では明らかに変化した。机にしがみついた歴史研究者をフィールドに投入し、農村の人間関係のただなかに放り出す試みは、こんな副次的結果も生み出したのである。ベンガルの自然の魅力に心ゆくまで浸ったことと並んで、私にとっては大きな体験であった。

8 胚種の宿るところ

こうして見て来ると、大義（大目的）のための研究、つまりベンガルあるいはバングラデシュの現在の状況から課題を立てて、その解決に邁進するというような研究は行ってこなかったことになる。マルクス主義全盛期の「～すべきである」という呪縛から解放されることによって、やっとなんとか研究者としての道を見出すことのできた者には、こういう自分の興味と関心の赴くままに進んでいくほか、やりようがなかった。これでほんとうによかったのかどうかは分からない。しかし、小さな疑問の穴から眺めた世界を順次追っかけて行くことによって、その時代を生きた1人の人間の問いと相似形の研究は生まれるようである。一見アト・ランダムな個々の研究者の成果は、寄せ集めてみれば共通点も見つかるだろう。また同時に、多くの差異も存在し、その異種混濁性が将来の胚種を宿していることもありうるだろう。この点に関して、私は自分でもあきれくらい楽観的である。

註

- 1 原忠彦の仕事が、後続の人類学者にどう受け止められたかについては、以下を参照。
外川昌彦、1993、「人々の生活とイスラム—人類学者原忠彦教授のフィールドワークから—」、
白田雅之・佐藤宏・谷口晉吉（編）『もっと知りたいバングラデシュ』、弘文堂、37-50 頁。
- 2 ホイヘル・ルイス・ボルヘス、鼓直（訳）、2002、『ボルヘス、文学を語る』、岩波書店、1 章。近年、『詩という仕事について』と改題されて、岩波文庫に加えられた。
- 3 ただし、文学は豊饒な多面体をなし、現在の至上価値など一顧だにしない作品もある。「永遠の／果てしない野に／夢みる／睡蓮よ／現在に／めざめるな／宝石の限りない／眠りのように」（西脇順三郎、「宝石の眠り」、同名詩集所収）
- 4 Richard M. Eaton, 1994, *The Rise of Islam and the Bengal Frontier 1204-1760*, Delhi, pp. 129-134.
See also Richard M. Eaton, *Essays on Islam and Indian History*, New Delhi, 2000, p. 257
- 5 こうした研究は、精確さを競う専門分野の研究から見ると、大風呂敷を広げただけの信頼性の薄いものに思われるかもしれないが、精緻な専門研究の傍らに、大きな網を打つ仕事も必要だろう。そこからしか誕生が期待されない視角が確かに存在するからである。

- ⁶ たとえば、つぎのベンガル語の論集がある。第2世代の谷口氏が共同編集者として名を列ねているが、この論集の刊行は基本的に第3世代の仕事といえよう。Shinkichi Taniguchi, Masahiko Togawa & Tetuya Nakatani (ed.), 2007, *Grām Banglā: Itihās, Samāj o Arthaniti*, Kolkātā.
- ⁷ 菱口善美「自然と農業」、1993、臼田雅之・佐藤宏・谷口晋吉(編)『もっと知りたいバングラデシュ』、弘文堂、3-5頁。
- ⁸ 臼田雅之、2013、『近代ベンガルにおけるナショナリズムと聖性』(東海大学文学部叢書)、東海大学出版会。
- ⁹ USUDA Masayuki, 1977, *Aswinikumar Datta's Role in the Political, Social and Cultural Life of Bengal*, (Ph. D dissertation submitted to University of Calcutta, unpublished).
- ¹⁰ 臼田雅之、1970、「ラビンドラナート・タゴールの歴史的素描」(修論・慶應義塾大学)。
- ¹¹ Surendranath Sen, 1956, *Aswinikumār Datta*, Kalikata.
- ¹² ジボナノンド・ダーシュ、臼田雅之(訳)、1992、『美わしのベンガル』(詩集)、花神社。ジボナノンド・ダーシュ、臼田雅之(訳)、2013、『ボノロタ・シェーン』(詩集)、『南アジア言語文化』、7、1-63頁。
- ¹³ ブラフモ・サマージの通史には、合理的理性主義、民衆主義の立場を取ったシャダロン・ブラフモ・サマージの観点から書かれた、Sivanath Sastri, 1911, 1912, *History of the Brahmo Samaj*, 2 volumes, Calcutta. (eprint in 1 volume in 1974) と、普遍主義と宗教的行を強調したケショブ・シェーンのノボビダン(新摂理派)の観点で書かれた、Prosanto Kumar Sen, 1950, 1954, *Biography of a New Faith*, 2 volumes. がある。研究書としてはDavid Kopf, 1979, *The Brahmo Samaj and the Shaping of the Modern Indian Mind*, Princeton. とFrans L. Damen, 1983, *Crisis and Religious Renewal in the Brahmo Samaj (1860-1884): A Documentary Study of the Emergence of the "New Dispensation" under Keshab Chandra Sen*, Leuven(Belgium). をあげておく。
- ¹⁴ USUDA Masayuki, 1989, 1990 & 1991, 'Historical Evolution of a Talukdari Village in Southern Bangladesh', 『東海大学紀要・文学部』、51, 52 & 55。
- ¹⁵ 日本の農村に生きる人間の生態を活写した、きだみのる「気違い部落」シリーズや、今東光「河内もの」の作品世界を眼前にするような面白い人間模様だった。

うすだ まさゆき ●東海大学文学部名誉教授